

## 寺岡隆先生のご退職にあたって

小野 浩一

Farewell words to Professor Takashi Teraoka

Koichi Ono (Chairman of the Department of Psychology, Komazawa University)

寺岡隆先生は平成12年3月で定年を迎え、7年間の本学での教員生活を終えようとしている。短いようで長かった7年間の思い返すと、先生が駒澤大学における心理学の研究、教育に対してなされた幾多のご貢献とご尽力に対する感謝の気持ちとともに深い惜別の念がこみ上げてくる。

寺岡先生が着任された平成5年からの7年間は心理学研究室にとって大きな変化、発展の時期であった。平成8年に学部カリキュラムを大きく変更し、そして平成10年には社会学科心理学コースから心理学科への衣替えをした。これらの過程の中で、寺岡先生は常に指導的役割を果たされ、適切な判断を示してくださった。いま考えると、もしあのおとき寺岡先生がおられなかったらどうなっていたらと思うことが多々ある。役職としては大学院心理学専攻主任、大学院自己点検委員会全学副委員長を務められ、特に大学院専攻主任として、駒澤大学の心理学の社会的使命を考慮し、研究・教育レベルの向上に腐心された。

本学心理学科における寺岡先生の存在の重みは、校務や学生の指導に力を注いでくださったということもあるが、それ以上に先生ご自身が現在まで一級の心理学者として現役でありつづけ、教員や学生に研究者としての範を示してくれたことである。ここで一級というのは国際的に通用する研究を行い、日本に何人もいない本当に優れた研究者のお一人であるということである。思えば寺岡先生は、私が大学院の学生のころからすでに一級の研究者でおられた。私は研究領域が近いこともあり寺岡先生の著作に触れて勉強したものである。ある時、日本心理学会で寺岡先生のお弟子さんが私を先生に紹介してくださったことがあった。先生は全く覚えておられないと思うが、これがあの先生か、といたく感動したものである。

駒澤大学で一緒に仕事をするようになって心理学者としての寺岡先生の卓越した才能を改めて思い知ることになった。うがった言い方ではなく、本当に優れた頭脳を持ち主なのだ。その頭脳の縦糸は整然と体系的に積み重ねられた知識体系である。そして横糸は才気溢れる柔軟的思考である。先生の卓越した才能の一つの現れはその驚くべき文章産出力である。これまで学会関係や校務でいろいろな文書を寺岡先生にお願いしたり、あるいは共同で作成するような機会があった。特に心理学科設立の際には、私たち2人が設立準備委員会のメンバーとして申請書類の担当箇所を作成にあたった。コンセプトについて話し合った後、文章化を先生に依頼すると、当日か翌日には、論理的で当を得た相当量の文章がフロッピー付きで手渡されるという次第なのである。先生からは多くの文章が産出されてくるが、しかし、原稿には普通制限がある。だから、先生がプリントアウトした原稿はびっしりと文字で埋められていて隙間がない。私が減らすと先生が増やす。いま思うととても貴重で光栄なコラボレーションであった。寺岡先生の心理学科における仕事でもう一つ特記しておかなければならないのは、初代編集委員長として、本誌「駒澤大学心理学論集」の発刊にご尽力くださったことである。昨年(平成11年)の第1号は創刊号であったので、表紙のデザインから紙面構成、レイアウト等細部にわたる諸々の作業が必要であったが、先生は長年の経験と洗練されたセンスを活かして、立派で格調高い紀要を作ってくださいました。

寺岡先生は、心理学基礎論を専門とし、重厚な理論を展開している厳格な研究者である。しかし、お人柄はそれに反してダンディーで遊び心一杯の気さくな方である。研究室での一仕事が終わると、助手

の部屋でコーヒーを飲みながらその場にいる人たちと楽しく歓談し、実に和やかな雰囲気醸し出しておられた。先生の研究室にはクラシック音楽が流れ、「研究室で囲碁はいいけど、将棋は格好悪いんですよ」といいながら将棋大会を開いたり、学生達にコントラクトブリッジを教えたりと、先生の周りにはいつも知性と文化と遊びの薫りが漂っていた。このように心理学研究室の要であった寺岡先生が定年とはいえ、ご退職になるのは大変残念であり、淋しいことである。

最初に「惜別の念」と書いたが、これには私個人としての特別の意味がある。今まで、師や先輩、あるいは同僚から多くを学び、いろいろな影響を受けながらなんとかやってきたが、ふと、周りを見渡してみると、そういった人々が徐々に少なくなっていることに気づく。人には当然個体差があり、早く衰える人もいるけれども、師や先輩方にはできるだけ長くお元気で活躍してほしいと思う。アメリカのように大学教員のリタイアの形にもいろいろな形態があっただけいいのではないだろうか。

尊敬する心理学者、そして同僚の寺岡先生はまだ十分ご壮健であり、これからもますますご研究を発展させ、そしてご自身の人生を楽しみつつ、現役を続けていただきたいと願うものである。そして今後ぜひ駒澤大学の心理学科のためにお力添えをいただきたくお願いする次第である。